

## 漢代画像石における龍の図像について - 第一分布 区篇 -

著者	周 正律
雑誌名	文化交渉 : Journal of the Graduate School of East Asian Cultures : 東アジア文化研究科院生論集
巻	6
ページ	115-138
発行年	2016-11-30
その他のタイトル	The Images of long (龍) on the Stone Reliefs of the Han Dynasty the episode of the first distribution area
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/10676">http://hdl.handle.net/10112/10676</a>

# 漢代画像石における龍の図像について

— 第一分布区篇

周 正 律

The Images of *long* (龍) on the Stone Reliefs of the Han Dynasty  
— the episode of the first distribution area

ZHOU Zhenglv

## Abstract

It is common to look at the Chinese Han dynasty as being unified in every aspect. However according to some recent discoveries regarding Han political and financial systems in local and central authorities, it seems that this view is untenable. And what of Han culture? Was Han culture indeed united completely under the imperial government? This paper discusses these matters by looking at the carved images of *long* (龍), or dragons on the stone reliefs of the Han dynasty. Through this study, the variations of the *long* carvings based on differing chronological periods and regions of the Han dynasty should become clearer.

**Keywords:** 龍 漢画像石 第一分布区 地域性 時代性

## はじめに

今までの龍に関する研究の大多数は、起源説をめぐって、文献史料を中心として展開してきたものである。しかし、文献に記録が残されているのはあくまで龍の一部の生態と能力に関するものである。また、先秦時代において、龍に関する史料は基本的に図像である。したがって、龍の起源説のような、先秦時代よりも以前の龍を中心として検討するには、先秦時代における図像資料と漢唐以降における文献史料を併用する、といった方法が用いられてきた<sup>1)</sup>。

また、もともと想像上の動物である龍のイメージは、時期によって変化するものであることは間違いない。確かに、一種の文化とされている「龍」に対して、文献史料に記録されているものと図像資料に描かれているものは、一つの貨幣の両面であり、一体両面の関係である。しかし、それはあくまで同じ時期の図像と文献が前提である。漢唐以降の文献に記されている龍と先秦時代の図像に描かれている龍とは、同じ認識に基づくものとは考えられない。そうだとすれば、前述した従来の龍に関する資料の利用方法で龍を検討するには、常に文献と図像における龍が不一致である、という問題を抱えながら進めるしかない。

一方、龍の一体両面が一致する同時期の材料をもとに、龍の時代的・地域的特徴とその変遷についての検討は未だ不十分なものである。だから、筆者は、龍の起源でなく、「当時の龍」に視点を置くことにした。各時期における龍に対する認識を、文献史料と図像資料におけるものそれぞれで分析し、そこから龍の時代性と地域性を把握しようとする。したがって、最初に検討する時代を、龍の一体両面が一致する材料がある漢代に特定した。

また本稿は、上述した研究の一環として、図像資料に重心を置くものである。特に出土地と年代について比較的正確に判断できる漢画像石を考察の中心にする。加えて、画像石とは少し異なり、現存する数も少ないが、同じく漢代の墓の装飾である壁画も補助材料として用いる。そうした考察により、背景である漢代における地域的文化的異同と変遷の実態の一側面も含めて、当時における龍の時代的・地域的特徴とその変遷を取り上げることが可能となる。

### 一、漢画像石第一分布区について

漢画像石墓は中国全土に数多く広く分布し、共通する部分がありながらも、各地域における文化の差異の影響による異なる部分がみとめられる。全国の画像石墓に現れた龍の図像の総数も膨大なものである。深度と精度を考慮し、地域ごとに考察を行うことが妥当であろう。

漢画像石の分布の区分は、主に信立祥氏が著した『中国漢代画像石の研究』に依拠する。20

---

1) 龍に関する先行研究の状況は、拙稿「龍に関する研究の現状について」(『文化交渉 東アジア文化研究科院生論集』第4号、関西大学、2015年、251-262頁)を参照。

年以前に提出された区分基準であるが、その後発見された画像石墓と散逸の画像石を合わせてみても、特に変更するところがないため、そのまま使用しても問題ないと考えられる。

本稿では、信氏の区分説に基づく画像石第一分布区における龍の図像を分析することとする。

## 1、画像石の分布について

さて、信立祥氏によれば、今の中国の行政区画をベースに、漢王朝の領土に当たる部分は、画像石の分布の密集度から主に五つの分布区に分けることができる。その中の第一分布区は、

山東省全域、江蘇省北部、安徽省北部、河南省東部と河北省南部という地域である。その範囲は、山東省南西部と江蘇省北部の徐州市を中心として、東は海辺から西に河南省の安陽と永城の一線まで、北の山東半島の北端から南に揚州までであり、漢画像石の発見地点が200ヵ所余りにも及んでいる。この地域は、漢画像石の分布範囲が最も広く、そして発見数量も最も多い最も重要な区域である<sup>2)</sup>。

また、第一分布区が最も重要な区域であると位置付けられた理由については、以下のとおりである。

この五つの分布地区の中では、第一区、第二区は、早くも前漢晩期に画像石墓を営造し始めたので、漢画像石の発源地といえる重要な地域である。特に第一区は、漢画像石の所属の建築形式、例えば墓室、墓上祠堂、墓闕、摩崖造像などと、漢画像石の各種の芸術的表現手法及び様々な図像テーマが最も広範で十分に活用されていたので、漢画像石の集大成の地区といっても過言ではないであろう<sup>3)</sup>。

つまり、全体的に見れば、第一区の画像石は、発生時間も早く、持続時間の幅も長く、影響する地域の広さも広範なものである。

確かに、第一区は、漢代当時の政治中心である長安と洛陽とは少し離れている場所であるが、その主な構成地域である当時の齊、魯、楚（後漢では彭城国<sup>4)</sup>）の国（基本的に現在の山東省と江蘇省北部にあたる地域）は、古来発展が進んでいる地方である。その中、齊国は、周の時代で太公の封地とされ、

---

2) 信立祥『中国漢代画像石の研究』（同成社、1996年）、5頁。

3) 信立祥『中国漢代画像石の研究』（同成社、1996年）、5頁。

4) 『後漢書』「和帝紀」

太公以齊地負海舄鹵、少五穀而人民寡、乃勸以女工之業、通魚鹽之利、而人物輻湊<sup>5)</sup>。

とあるように、魚と塩の豊かさに恵まれ、人口が密集する地域になり、漢代では、

其俗彌侈、織作冰紈綺繡純麗之物、號為冠帶衣履天下<sup>6)</sup>。

つまり、俗風は奢侈であり、全国でも誇る高級な衣服類の産地であった。つづいて、魯国は以下のように記されている。

今去聖久遠、周公遺化銷微、孔氏庠序衰壞。地驥民眾、頗有桑麻之業、亡林澤之饒。俗儉畜愛財、趨商賈、好訾毀、多巧偽、喪祭之禮文備實寡、然其好學猶愈於它俗<sup>7)</sup>。

その学ぶことを好む習俗が原因であるかもしれないが、その地は、

漢興以來、魯東海多至卿相<sup>8)</sup>。

つまり、高い官位まで到達している人が多い。だから、厚葬の風習がある当時では、この地に画像石墓が流行するものもおかしくはなからう。また、現在江蘇省北部の徐州一帯は、両漢ともに諸侯王の封地である楚国（彭城国）の中心にあたる地域であり、埋葬者の身分が高い画像石墓は数多く残されている。

画像石における龍の図像を最初に検討する分布区としては、上述のと通りの漢代における文化・経済の先進地である第一区が最もふさわしいと考えられる。

## 2、画像石第一分布区における龍の図像の概況

第一区における龍の図像が出現する画像石墓は表1に示したとおり、総47か所があり、およそその分布区の画像石墓の総数の1/4を占めている。その中、収集できた龍の図像の数は80件を超える<sup>9)</sup>。表1に挙げている画像石墓は、墓室が残され、副葬品が数多くあり、または碑文があるものであるため、それらの墓にある龍の図像の地域はもちろん、作成時間も判断できる。よって、検討材料の中心とする。その他、同じ第一区で出土したものではあるが、具体的な所

5) 『漢書』「地理志下」

6) 『漢書』「地理志下」

7) 『漢書』「地理志下」

8) 『漢書』「地理志下」

9) 龍の図像の識別方法は、拙作「動物図像の識別について—漢画像石における龍の図像を中心に」（関西大学『東アジア文化交渉研究』第9号、2016年、357-381頁）を参考。

属墓と作成時間が不明である龍の図像がある画像石も多数存在し、本論文では、画面の構成と図像の内容を説明するときの参照材料として使用する。

表1 第一分区における龍の図像がある漢代画像石墓

No.	墓名	年代
1	山東淄博市臨淄徐家村戰國西漢墓（M39）	西漢早中期
2	山東平陰新屯漢畫像石墓（M1 M2）	西漢武帝或昭帝宣帝時期
3	山東滕州市山頭村漢代畫像石墓（M2）	M2 西漢元帝至王莽（前48至20）
4	山東鄒城市臥虎山漢畫像石墓（M2）	西漢晚期或東漢初期
5	東安漢裡	王莽時期至東漢初
6	孝堂山	東漢初期 約1世紀以內
7	兩城山	順帝時期 東漢中期
8	武氏祠	東西闕
9		武梁祠
10		東漢中後期（147年以後）
11		武開明祠
12		武斑祠
13	山東嘉祥紙坊畫像石墓	不明（約為東漢中晚期）
14	山東棗莊方莊漢畫像石墓	東漢中晚期
15	山東青州市塚子莊漢畫像石墓	東漢晚期
16	山東東阿縣鄧廟漢畫像石墓	132年後東漢晚期
17	山東臨沂吳白莊漢畫像石墓	東漢晚期
18	山東莒縣沈劉莊漢畫像石墓	東漢晚期
19	山東章丘市黃土崖東漢畫像石墓	東漢晚期
20	山東棗莊市橋上東漢畫像石墓	東漢晚期
21	山東淄博張莊東漢畫像石墓	東漢晚期
22	山東平邑東埠陰漢代畫像石墓（M1）	東漢
23	山東滕縣曹王墓	東漢末年
24	山東滕州市三國時期的畫像石墓	三國魏晉
25	河南永城太丘一號漢畫像石墓	東漢早期
26	河南永城僂山漢畫像石墓	東漢早期
27	河南永城固上村漢畫像石墓 M2	東漢早期
28	河南永城保安山漢畫像石墓	東漢早期
29	河南永城太丘二號漢畫像石墓	東漢中期偏早
30	江蘇睢寧木山漢畫像石墓 M1	東漢中晚期
31	江蘇邳州車夫山前埠漢畫像石墓	東漢中晚期
32	江蘇徐州佛山畫像石墓	魏晉再葬画像石 东汉 中晚期

33	江蘇徐州賈汪畫像石墓	魏晉再葬画像石东汉 中晩期
34	江蘇銅山縣班井村東漢墓	東漢晩期（約公元167-189年）
35	江蘇徐州十里鋪漢畫像石墓	東漢晩期（約公元167-189年）
36	江蘇徐州、銅山五座漢墓	畫像石墓東漢末期
37	江蘇邳縣白山故子兩座東漢畫像石墓 (M1)	公元175-東漢末期
38	江蘇泗陽打鼓墩樊氏畫像石墓	曹魏時期（199-三世紀末）
39	安徽蕭縣破閣漢墓 XPM127	東漢中期
40	安徽蕭縣王山窩漢墓 XWM22	東漢中期
41	安徽蕭縣破閣漢墓 XPM61	東漢中期
42	安徽蕭縣破閣漢墓 XPM88	東漢中期
43	安徽蕭縣王山窩漢墓 XWM23	東漢中晩期
44	安徽蕭縣王山窩漢墓 XWM24	東漢中晩期
45	安徽蕭縣王山窩漢墓 XWM50	東漢中晩期
46	安徽蕭縣馮樓漢墓 XFM 8	東漢中晩期
47	安徽亳縣曹操宗族墓葬	漢魏時期

また、時間的に、比較的早い時期にあたる前漢早中期から王莽時期にかけての画像石墓は、すべてが漢代当時齊魯の国にあたる山東省の西南部にある。河南省東部は永城県あたりを中心に、基本的に前漢早期のものである。江蘇省北部と安徽省北部においては、後漢中期から晩期までのものがすべてである。河北省南部に関しては、残念ながら龍の図像がある画像石墓がなかった。

## 二、龍の外形の特徴

龍の外形の特徴を考察するには、人間の顔に五官、体に五体というように、外形全体を幾つかの基礎組成部分に分けてみてよいと考えられる。拙稿「動物図像の識別について—漢画像石における龍の図像を中心に」でも少し言及したが、その区切りの仕方を検討するときに参考として、唐宋時代の画家が提出した龍の描き方の「三停九似」がある。「三停」は簡単に解釈すれば、長い龍の体を描くときに、曲げておくべきところを提示するものであり、龍の外形の特徴とは特に関係がない。重要なのは「九似」の部分である。「九似」の説は管見の限り、二とおりの説があり、ともに明代の唐寅が編纂した『六如居士畫譜』に収録されている。まずは、五代南唐末の董羽がまとめた龍の描き方がある。

九似者、頭似牛、嘴似驢、眼似蝦、角似鹿、耳似象、鱗似魚、須似人、腹似蛇、足似鳳、

是名為九似也。（中略）貴乎血目生威、朱須激發、鱗介藏煙、鬚鬣肘毛爪牙噴伏其雨露、踴躍騰空、點其目而飛去<sup>10)</sup>。

同書に北宋時代の郭若虚の見解も見られる。

分成九似、角似鹿、頭似駝、眼似鬼、項似蛇、腹似蟹、鱗似魚、爪似鷹、掌似虎、耳似牛<sup>11)</sup>。

また、『爾雅翼』に収録されている「九似」の記述は、郭氏が提出したものとは同じであるため、重複して挙げることはしない。上述した「九似」の説を簡潔にまとめてみれば、龍の外形の特徴は基本的に、湾曲した蛇体に馬のような長い鼻先、鬚、牙、舌、耳、二角、四足爪、鱗、棘（あるいはヒレ、鬚鬣肘毛・逆毛、）などがある、ということである。

しかし、「三停九似」とは、あくまで進んだ絵画技法をもってこそ細かく描かれる龍を前提にして得られる経験である。図像の精度が後世の文人絵画まで到達していない漢代画像石には、「三停九似」が提示した外見の特徴の全てが通用できるはずはなかろう。したがって、上述した特徴から龍の輪郭だけがある図像でも認識できる部分を選出してみれば、頭の部分に角、耳、鼻部、体には全身を覆うため描かれる場合も多い鱗を取り上げる。さらに足・掌、尾がある。加えて、体の外縁に描かれる棘（あるいはヒレ、鬚鬣・逆毛）、翼（あるいは肘毛）がある。これら八つの特徴をもって、第一区における龍の図像を検討し、第一区内部における龍の外形の共同する部分と相異なる部分を取り上げ、地域的特徴と時間的変遷について探ってみたい。

## 1、角

上述「九似」の両種の説法によれば、龍の角についてはともに「鹿の角」とされていること

---

10) 『六如居士畫譜』卷三「畫龍輯議」。

11) 『六如居士畫譜』卷一「製作楷模」。

がわかる。しかし、第一区における龍の図像を見てみれば、およそ全部が、図1が示したとおりの、先端が尖って分枝のない牛の角のようなものである。



図1 武氏祠 東西闕 東漢中後期（147年以後）（局部）<sup>12)</sup>

第一区において唯一鹿の角をしている龍の図像は、図2が示したとおり、画像石ではなく、壁画に表れたものである。その墓は前漢初期における梁国の王陵の中の一つであるとされている<sup>13)</sup>。

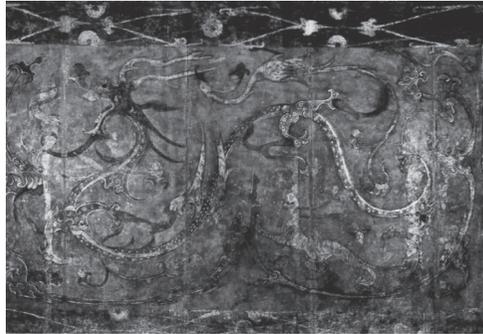


図2 河南省永城縣芒碭山柿園漢墓 前室頂部壁画（局部） 景帝・武帝時期<sup>14)</sup>

一方、図2の龍の画像と時期が近いものとして、湖南長沙馬王堆漢墓で出土したT型絹絵に表れたものがある。図3で見られるように、それも牛の角をしている龍である。

12) 巴黎大學北京漢學研究所『漢代畫像石全集 二編』（學苑出版社、2014年）113號、76頁。

13) 河南省文物考古研究所編『永城西漢梁國王陵與寢園』（中州古籍出版社、1996年）。

14) 徐光翼主編『中國出土壁畫全集』（科學出版社、2011）、第5卷、1頁。

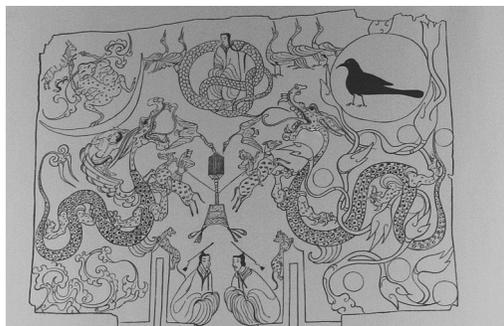


図3 湖南長沙馬王堆漢墓 T型絹絵模写（局部）文帝時期<sup>15)</sup>

また他に、先秦時代の青銅器などでよく見られるとされている麒麟の角をしている龍<sup>16)</sup>の図像も、ここでは見当たらない。つまるところ、少なくとも、第一区の龍の図像では、むしろ図1が示したような分枝がない牛角の形の角が主流であり、また図2と図3をも含めて考えてみれば、「角似鹿」といった龍は、ここでは少数で珍しい個別事例であると言ってもよからう。

## 2、耳

耳に関しは、表現されていない場合もあるが、もし描かれていれば、それは例外なく「九似」の説に挙げた牛のような耳である。図4はその一つの例である。



図4 山東東阿縣鄧廟漢畫像石墓 M2中室北壁東側（局部）132年后～東漢晚期<sup>17)</sup>

15) 笹間良彦、『図説 龍とドラゴンの世界』、遊子館、2008年

16) 大形徹「龍角考：その一、麒麟の角」（『人文学論集』33号、大阪府立大学、2015年、13-44頁）。

17) 陳昆麟 孫淮生 劉玉新 楊燕 李付興 吳明新「山東東阿縣鄧廟漢畫像石墓」（『考古』2007年第3期、224-243頁）、238頁。

### 3、鼻部

龍の鼻部について、上述董氏が提示した「九似」には、「嘴似驢」と述べられている。前節に挙げていた図像を参照して、その「嘴似驢」が提示していることを簡単に説明してみれば、龍の鼻部は、驢馬のような長くて先端が些か丸めのものであるということがわかる。時には上下の唇に飛び立っているヒゲと思われる部分もあると見える。また、長く伸びているヒゲよりも、鼻部上下あたりに突起物があるように描かれている場合が多い。いずれにせよ、鼻部全体の形を確認するには影響がないものである。

### 4、鱗

龍の鱗は、背中と腹がそれぞれ異なるとされている。前掲の唐宋画家の説によれば、その形は「鱗似魚」「腹似蛇」、あるいは「腹似蟹」「鱗似魚」のようである。鱗は問題なく、魚の鱗と同じ形のものであると述べている。それは前掲の図をみればわかるように、第一区の画像石における龍もそうであり、全身を覆う魚・蛇が持つような鱗をしている。彫刻技法と拓本の画質によればはっきり確認できないものも存在するが、特に大きな違いはない。

腹の部分について、「腹似蛇」と「腹似蟹」という一見違うように述べているが、実際、蛇の腹は複数の貝が一枚ずつ重なって並べたようなものであり、「蟹」とは

蟹、大蛤。雉入海所化。从虫辰聲<sup>18)</sup>。

ということであり、それに、

蚌、蟹屬。从虫丰聲<sup>19)</sup>。

とあり、蚌が蟹の一種であると見なされる。「蛤」「蚌」は紛れもなく貝類である。よって、「蟹」も貝類であると判断して間違いなからう。従って、「腹似蟹」はおそらく「腹似蛇」と同じことを指していると推測できる。つまり、龍の鱗は、まさに蛇や魚が持つものと同じものである。また、第一区の龍の図像をめぐるれば、基本的に龍の側面か上面に視点を置くものであり、腹の部分はほぼ側面から見る時に少しだけしか見えない。それでも、確認してみれば、いずれも上述とおり、蛇かワニの腹と同じようなものである。

### 5、足・掌

この地域における龍の図像で見える龍の足は、前漢時代から後漢の初期にかけての間では、

18) 『説文解字』「虫部」

19) 『説文解字』「虫部」

基本的に図5が示したとおりのワニのような短い足をしている。また、図像上においても体の両側に二足ずつという配置の仕方である。

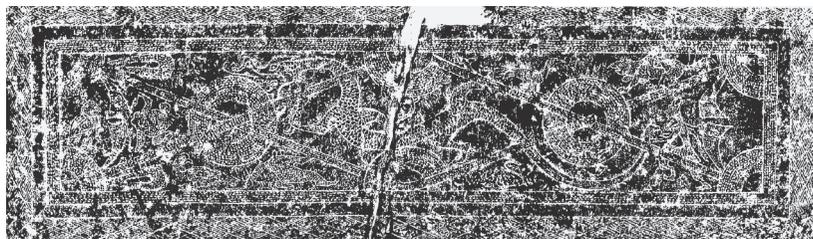


図5 山東省東安漢裡 王莽時期至東漢初<sup>20)</sup>

一方、後漢時代の早期以後になると、それが前掲図1と図4のように、基本的に後ろ足の膝が逆関節である犬や馬や虎などのような走っている獣の足になる。まさに前掲の「足似鳳」ということである。図像上の配置も、四足が体の下になり、龍が走っていると見えるようになる。

掌に関しては、作成時間を問わずに、第一区における龍は、基本的には虎か犬のような「走獣」の掌をしている。前掲「掌似虎」と矛盾しない。しかし、爪については、尖っている爪が確認できるが、いずれも「爪似鷹」には当たらず、つまり鷹のような鉤爪はしていなかった。

他に、特例として、「双龍穿壁」「雙結龍」「雙頭龍（もしくは虹）」という特殊な構図の「龍」とされるものがあり、場合によっては足が省略されたものもある。こうした特殊な構図で足のない龍については、また次章で詳しく検討する。

## 6、棘

第一区において、龍の背中に棘（あるいはヒレ、鬃鬣・逆毛）が描かれる事例は基本的にない。唯一あった例としては、以下の図がある。

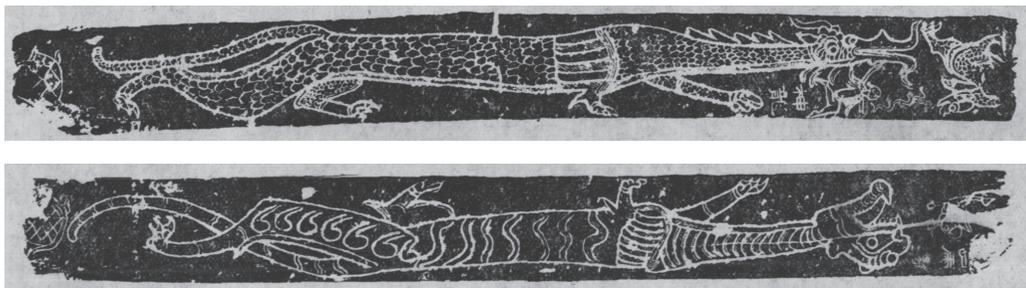


図6 安徽亳縣曹操宗族墓葬 董園村二號墓石門 漢魏時期<sup>21)</sup>

20) 巴黎大學北京漢學研究所『漢代畫像石全集 初編』（學苑出版社、2014年）64號、53頁。

21) 安徽省亳縣博物館「亳縣曹操宗族墓葬」執筆者李燦（『文物』1978年第8期、32-45頁）、35頁。

つまり、第一区では、龍は、基本的に背中に何もなく体が鱗に覆われて滑らかなものである。まさに「項似蛇」ということである。

## 7、尾

前述「九似」両説のいずれでも龍の尾を単独に取り上げておらず、ただ「三停」の部分で「自首至項、自項至腹、自腹至尾<sup>22)</sup>」と「自首至膊、膊至腰、腰至尾<sup>23)</sup>」と説明し、図5に見えるものと同じ、龍の尾は体と一体であり、体がそのまま延長して尾になるという印象を与える。また、現在でもこうした蛇のような、尾の末端まで長くくねくねとした体をしている龍は確かに多く見られる。一方、第一区の龍の画像において、上述のような尾と体の関係以外に、もうひとつの描き方がある。それは図6に示したとおり、犬や馬や虎などと同じく、尾が体の後部に生えるという描き方である。

実際、前述の四足の配置とも関連して、こうした尾と体の接続の型式により、第一区の画像石に表れている龍は大きく二種類に分けることができる。便宜上本稿では、尾と体が一体になり、四足が二本ずつ体の左右両方に配置するワニか四脚の蛇かのような外見をしている龍は「蛇型」と称し、もう一種の、体の後方に尾が生え、四足がともに体の下にあって走っている獣に見える龍は、「走獣型」と称する。また、第一区では、蛇型が前掲表1の1から5番までの墓に出現し、その以後のすべてが走獣型の龍である。つまり、表1にある画像石墓だけで見れば、蛇型の龍の図像は、前漢早中期から後漢初期にかけての間の山東省西南部に存在し、一方、走獣型は後漢早期から末まで第一区全域に分布している。

また、図3馬王堆の龍に見える尾の先端にあるヒレか飾りのようなものに関しては、時期と地方を問わず、蛇型にも走獣型にも、一切それがない。

## 8、肩の後ろにある逆毛・翼について

最後に、少し特殊な部分で、董羽がいう「肘毛」がある。これは基本的に前足の肩から肘にあたる場所に描かれるものであり、時には図4に示したとおり、翼のように見える場合もある。こうした肘毛・翼がある龍の画像は、基本的に後漢時代から出現し、それのない龍と両方が並存しながら第一区全体に点在している。その数は、表1において、総数約80件中に20件に近い。「双龍穿壁」「雙結龍」と「雙頭龍（もしくは虹）」などの特殊例を除けば、肩の後ろに毛か翼があるものとなないものがほぼ半分半分といった状況である。

こうした肘毛・翼がある龍の具体的な配置としては、幾つかのコマが複合する画像石の最上部の枠、もしくは「羽人」と一緒に仙人の世界を描く画面にある。一方、翼がないものについては、一般的には単体で一つの枠を占め、または人間の世界と思われる図像に配置されている。

22) 『六如居士畫譜』卷三「畫龍輯議」。

23) 『六如居士畫譜』卷一「製作楷模」。

しかし、こうした配置の仕分けはあくまでおおまかなものであり、第一区の全ての画像石墓に通用することではない。また、龍だけでなく、他の動物にも、想像上のものであれ、実在するものであれ、そのような装飾をつけることが確認できた。換言すれば、それは龍だけにある特別なものではなかった。

そうしてみれば、おそらくその「肘毛」は最初確かに翼であり、羽人が持っているものと同じく、人間の世界を逸脱したある種神秘的な力の象徴としたものであろう。しかし、ことが龍になると、それがあってもなくても、龍は想像上の生き物であり、神秘的なものである。だから、龍に描かれる翼が最終的に「肘毛」と認識され、また、仮に最初に何かの意味が込められて意識的に区別されたとしても、最後はただ描き方のバリエーションとなったと考えてよからう。

## 9、小結

以上、漢画像石第一分布区における龍の外形について、角、耳、鼻部、鱗、足・掌、尾、棘（あるいはヒレ、鬃鬣・逆毛）、肩・肘の後ろにある逆毛（あるいは翼）といった八つの部分に分けて、それぞれを検討してきた。全体的な結果として、本地域における龍の外形の基本的な要素は、時間的にも地理的にも相同する部分が多いと言ってよからう。

また、龍の足の配置と、尾と体の接続型式を合わせて検討してみれば、山東省西南部において、前漢中期から後漢前期にかけて、龍の外形は蛇型から走獸型に変わったという事実が確認できた。他の地方では、特殊例である「双龍穿壁」「雙結龍」の中の一部足がないものを除けば（次章では詳しく検討するが、時間と地方により、二匹の走獸型の龍の体を伸ばして「双龍穿壁」「雙結龍」を構成する事例もある）、後漢早期から末期まで、ほぼ全てが走獸型である。

## 三、龍の図像の構図、内容及び墓室内における配置

第一区の龍の図像には、基本的な表現パターンとして、「交龍」（あるいは「雙結龍」「双龍穿壁」）、龍と虎の組み合わせ、大勢の動物の行列の中の一つ、仙界と思われる異界の動物の一つなどがある。時にはこうしたパターンが重なって使用されることも見られる。こうした普遍性のある表現の仕方の由来はおそらく画像石より遥かに早い時期のものであるが、画像石にこそ見られる特別な扱い方、さらには時間の推移に伴う変容も見られる。またそうした龍の図像の扱いと変容の実態からは、漢画像石第一分布区における龍の図像の時代的特徴と地域的特徴がうかがえる。

### 1、「交龍」「雙結龍」の図について

第一区で、一番よく見られる龍の図像は図7に示したようなものである。

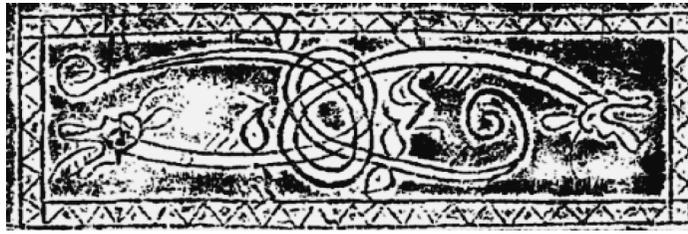


図7 山東淄博市臨淄徐家村西漢墓 (M39) 空心磚拓本 前漢早中期<sup>24)</sup>

報告によれば、上掲の図は、主墓室にあり、棺の外槨にあたる壁を構成する12の画像磚の一つである。その上に見られる二匹の龍は、蛇型のものであり、四足もはっきり確認できる。こうした龍の図像の構図は、時期と地域を問わず、第一区に数多く現れる。こうした構図の名称について、以下、別の墓ではあるが、同じく山東省のものとして参考するにしよう。

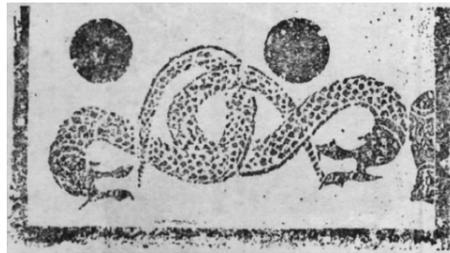


図8 山東嘉祥宋山安國祠堂畫像石 第三十石 桓帝永壽三年 (157年)<sup>25)</sup>

図8に示したものは、足が省略された特殊なものであるが、同墓にある碑文を見れば、

陽山琢砺磨治規矩施張襄帷反月各  
有文章調文刻画交龍委蛇猛虎延視玄猿  
登高陟熊□戏众禽群聚 (第六行)

26)

とあるように、その図は「交龍」の図であることは明らかである。また、山東蒼山城前村の漢墓からも、碑文付きのものが発見された。

24) 山東淄博市臨淄旅遊文化局 執筆者王會田崔建軍「山東淄博市臨淄徐家村戰國西漢墓的發掘」(『考古』2006年第1期、19-29頁)、25頁。

25) 朱錫祿「山東嘉祥宋山1980年出土的漢畫像石」(『文物』1982年第5期、60-70頁)、69頁。

26) 碑文釈文 同上



図9 山東蒼山城前村墓 前室北中立柱 桓帝元嘉元年（151年）<sup>27)</sup>

図9は、後漢中後期ののものであり、構図はいささか複雑になっているにもかかわらず、二匹の龍が交る構図であることは間違いなからう。そして、碑文にある説明によれば、

元嘉元年八月廿四日立郭(椁)毕成以送  
 贵亲魂零(灵)有知杓(杓)哀子」孙治生兴政  
 寿皆万年薄疎郭(椁)中画观后当朱爵(雀)」  
 对游栗拙(仙)人中行白虎后凤皇中□柱夔  
 结龙主守中圖」辟邪夹室上殃五子举僮女随 <sup>28)</sup>

図9は、「双結龍」と称され、「中霤」を守り、辟邪の機能があると認識されていることがわかる。「中霤」とは、王逸が『楚辭章句』で、

中霤、室中央也<sup>29)</sup>。

と注釈し、つまり部屋の真ん中ということであり、換言すれば大き家宅の中央の室でもある。また、それが漢代では、

五祀者、何謂也。謂門、戸、井、灶、中霤也。所以祭何。人之所處出入、所飲食、故為神而祭之。(中略) 六月祭中霤。中霤者、象土在中央也<sup>30)</sup>。

人々が日常よく利用し、出入するという理由で、祭祀すべき神ともされている。また、第一区において、それらの「交龍」や「双結龍」の画像は、基本的に墓の中央室の中に、あるいは中央室に向かう扉の門楣に設置されている。つまり、前述碑文が説明した「双結龍」の機能は、第一区において、時期にかかわらず、一つの共通的認識である。

また、発掘報告によれば、「交龍」と「双結龍」のほか、もう一種よく類似する構図の龍の図

27) 張其海「山東蒼山元嘉元年畫象石墓」(『考古』1975年2月、124-134頁)、127頁

28) 題記釈文 同上

29) 『楚辭章句』「九嘆」

30) 『白虎通』「五祀」

像がある。それは図10が示したとおりの、いわゆる「双龍穿壁」の図である。

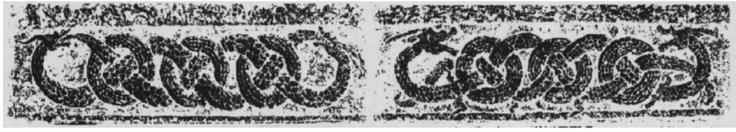


図10 河南永城保安山漢畫像石墓 前室門楣拓本 東漢早期<sup>31)</sup>

第一区の画像石を概観すると、そうしたような明確な「双龍穿壁」の図が現れたのは、基本的に後漢前期以降になる。それ以前に関しては、第一章にあげている表1の1から5番の墓にあるもの全てが、下図のようなものである。

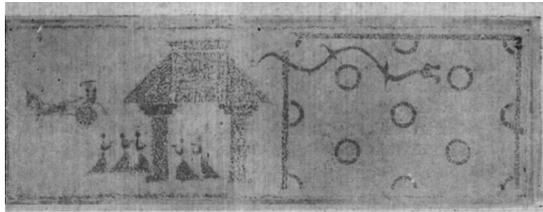


図11 山東平陰新屯漢畫像石墓 (M1 M2) M2 西壁 西漢武帝或昭宣帝時期<sup>32)</sup>

前掲図5もそうであり、図11を見ればわかるように、それは確かに「交龍」「双結龍」の図ではない。しかし、「双龍穿壁」というのも不適切であろう。現に図像上では、一匹の龍が、壁と思われる輪と菱形で構成する幾何形の装飾図のうえを飛びかけている、といったような図像である。強いて言えば、それを「龍と壁」の図といったほうが図像にあるものにふさわしいであろう。最初に「龍と壁」の図が発生した時のことについて述べる記述はないが、おそらくそうした図の由来は、瑞祥とされている龍と縁起のよい壁を一緒に並べるといった発想によるものであろう。

31) 永城市文物局 永城市博物館 執筆者李俊山「河南永城保安山漢畫像石墓」(『文物』2008年第7期、80-83頁)、82頁。

32) 濟南市文化局文物處 平陰縣博物館籌建處 執筆者劉伯勤 劉善沂「山東平陰新屯漢畫像石墓」(『考古』1988年第11期、961-974頁)、967頁。



図12 河南浚縣姚廠墓 石柱 桓帝延熹三年（160年）<sup>33)</sup>

また、図12に示したように、壁を描く図は、時期に関係なく「双龍穿壁」の図と並存している。また、上の図の壁に綴る紐があり、その形状はまさに図9が示した「双結龍」に類似している。推測ではあるが、上述の吉祥を一緒に並べて描く発想により、壁に綴る紐を龍で代替することには十分に可能性がある。実際、時期が後漢中期以降になると、「交龍」「双結龍」、あるいは図11のような「龍と壁」も、一切姿が消え、残されているのは「双龍穿壁」のみとなる。

また、前章でも少し触れたが、図13からわかるように、後漢晩期になると、同時期に図10が示した「交龍」「双結龍」と壁の図に由来する「双龍穿壁」の構図が数多にあるにもかかわらず、強引に短い走獸型の龍の体を伸ばして「双龍穿壁」の図を描く事例が現れる。



図13 山東東阿縣鄧廟漢畫像石墓 M1 前室西面横額（右側局部） 132年后東漢晩期<sup>34)</sup>

それによれば、第一区において、一種の構図規範のようなものがまだ残されている環境の中にあっても、龍の外形の変化は強く広く普及していたことがわかる。

## 2、龍と虎

「双龍穿壁」の出現頻度と並ぶものとして、もう一つの構図がある。それは、「龍と虎」の組合せである。「龍と虎」組合せの発生を考察してみれば、図14に示したとおり、それは実に早いものである。

33) 高同根「簡述浚縣東漢畫像石的雕像藝術」（『中原文物』）1986年第1期、88-90頁）、88頁

34) 陳昆麟 孫淮生 劉玉新 楊燕 李付興 吳明新「山東東阿縣鄧廟漢畫像石墓」（『考古』2007年第3期、224-243頁）、229頁。

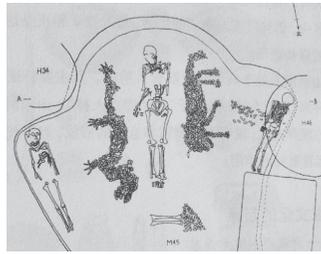


図14 貝龍 河南濮陽西水坡 前五千年紀<sup>35)</sup>

漢代になっても、この組合せは「不祥を辟す」という機能により、銅鏡、瓦、画像石など、生前死後の場面で様々な形で働いている<sup>36)</sup>。特に銅鏡では、「四神」が揃って表れていても、その銘文では「龍と虎」の機能だけを強調する場合がある。

第一区でも、全時期・全地方において、龍と虎の組み合わせが見られる。最初は、図15のとおり、棺の左右の石板にそれぞれ龍と虎を設置するものであった。それは、図14の配置とよく似たものである。

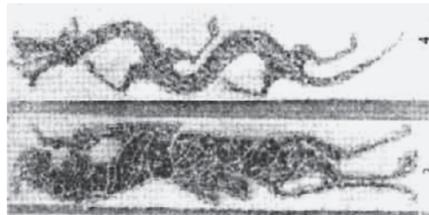


図15 山東鄒城市臥虎山漢畫像石墓 M2南石棺畫像石拓片(一部) 西漢晩期或東漢初期<sup>37)</sup>

また、そこにある龍の外形は、となりの虎と大きく違って、蛇型である。後漢前期以降になると、龍と虎の組み合わせは残されつつ、その配置も、画像石墓の地上建築の左右闕、地下墓室の門楣、門扉、左右柱、通路両側の壁などに、幅広くなった。ただし、その中の龍は、図16にあるもののように、虎と体型が近くなり、走獸型になっている。

確かに、時期と地域を問わずに、「龍と虎」はそのまま特別な組合せとして、長い間ずっと用いられている。同時に、その一見変化がなさそうな組み合わせの内部では、後漢時期から全地域のものと共に、龍の外形が蛇型から走獸型に一転したという変化がうかがえる。

35) 林巳奈夫『龍の話 図像から解く謎』(中公新書1118、1993年)、213頁(原図は『文物』1988年3月より)

36) 周正律「漢代における龍の属性の多様化について」(『東アジア文化交渉研究』2015年第8号、451-475頁)、458頁。

37) 鄒城市文物管理局 執筆者胡新立「山東鄒城市臥虎山漢畫像石墓」(『考古』1999年第6期、43-51頁)、46頁。

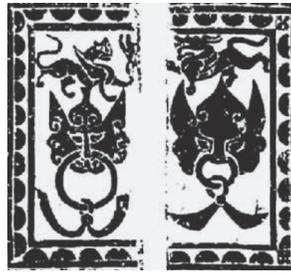


図16 山東臨沂吳白莊漢畫像石墓 左右門扉 東漢晚期<sup>38)</sup>

### 3、犬に類似する龍

後漢中期から、第一区の各地方に、図17に表れたもののような、犬によく似ている龍が出現した。



図17 山東莒縣沈劉莊漢畫像石墓 西門楣背面拓片 東漢晚期<sup>39)</sup>

上の図は構図的に、龍と虎の組み合わせが左右にあり、真ん中に「方相氏」（場合によっては羊の頭）が配置される極めて一般的なものでありながら、左の龍はいかにも狼か犬に近い動物に見える。外形だけでなく、構図と配置においても、犬と龍が混同しやすくなるものが現れた。

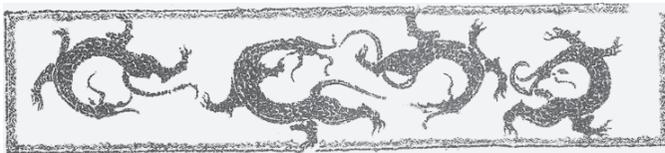


図18 安徽蕭縣破閣漢墓 XPM61 前室南壁門楣 東漢中期<sup>40)</sup>

図18が示したのは明らかに龍と認識できる。一方、図19は墓門代わりの石の一部である。図18

38) 管恩潔 霍啟明 尹世娟「山東臨沂吳白莊漢畫像石墓」(『東南文化』1999年第6期、45-55頁)、46頁。

39) 蘇兆慶 張安禮「山東莒縣沈劉莊漢畫像石墓」(『考古』1988年第9期、788-799頁)、795頁。

40) 安徽省文物考古研究所 安徽省蕭縣博物館『蕭縣漢墓』(文物出版社、2008年11月)、106-107頁

の門楣と同じく、門の一番上部に配置された画像であり、その構図も図18の龍の図と非常に類似している。

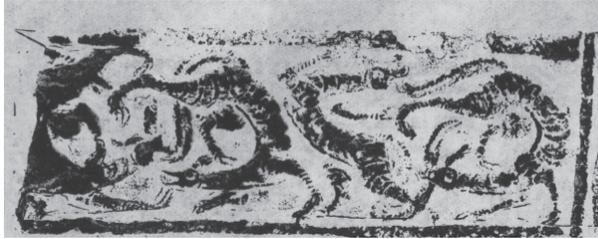


図19 江蘇邳縣白山故子東漢畫像石墓（M1） 堵門石（上局部） 公元175-東漢末期<sup>41)</sup>

しかし、そこに描かれたものを検討してみれば、どちらかという、狩猟の場面を表す図20に描かれる犬たちと近いものである。



図20 山東安丘漢墓後室西間北壁横額 局部<sup>42)</sup>

上述した事実について、後漢時代の当地の人々はすでに意識していたようである。

孔僖字仲和、魯國魯人也。自安國以下、世傳古文尚書、毛詩。曾祖父子建、少遊長安、與崔篆友善。（中略）因讀吳王夫差時事、僖廢書歎曰「若是、所謂畫龍不成反為狗者。」<sup>43)</sup>

という『後漢書』の記述がある。孔僖の感嘆の言葉からすれば、「畫龍不成反為狗」は当時の魯国ではすでに周知の俗語のようである。つまり、後漢中期から、当地域の図像上では、龍と犬

41) 南京博物院 邳縣文化館 執筆者尤振堯 陳永清 周甲勝「江蘇邳縣白山故子兩座東漢畫像石墓」（『文物』1986年第5期、17-30頁）、23頁

42) 中國畫像石全集編輯委員會『中國畫像石全集』（山東美術出版社、2000年6月）、第1巻、125頁。

43) 『後漢書』「儒林列傳上」

の体型が近くなり、両者の構図と配置も近似する傾向がある。やがて両者の見分けも簡単にできなくなり、描くときにも間違えやすくなっている。その理由については、前章でも言及した第一区における走獣型の龍の出現とその伝播の影響にあると推測できる。また、前の両節で検討した「双龍穿壁」の図と「龍と虎」の図からもうかがえるように、本地域において、後漢時期になると、山東省と河南省東部を始めとし、蛇型の龍に代わって、走獣型の龍が主流になったことは明白である。

#### 4、双頭の龍

第一区には、後漢時代のみで二、三例しかないが、図21に示した特殊な「双頭龍」の図が見られる。



図21 山東武氏祠 武開明祠石壁（局部） 東漢中後期（147年以後）<sup>44)</sup>



こうした龍の図は、甲骨文字の虹<sup>45)</sup>の字から由来するとされている。甲骨文字の「虹」はまさに二匹の龍が川の水を吸い取るシーンであるという見解がある<sup>46)</sup>。そのように認識している研究者は他にもいる<sup>47)</sup>。また、その説について、林巳奈夫氏も賛同の意を示し、かつ、虹と龍が関連している原因について、両者がともに陰と陽のエッセンスをもつものであると述べ、またその伝承の過程を示すものとして、中国各地で発見された戦国時代の玉器の玉横と玉簧の例を挙げている<sup>48)</sup>。

しかし、漢代では「虹」が龍の一種であるという認識の有無に関して、はっきり述べている文献資料はない。唯一虹と龍の関係を述べるものとしては、以下の記述である。

靈帝光和元年六月丁丑、有黑氣墮北宮溫明殿東庭中、黑如車蓋、起奮訊、身五色、有頭、體長十餘丈、形貌似龍。上問蔡邕、對曰「所謂天投蜺者也。不見足尾、不得稱龍。（後略）。」<sup>49)</sup>

44) 巴黎大學北京漢學研究所『漢代畫像石全集 二編』（學苑出版社、2014年）129號、76頁。

45) 郭沫若『甲骨文集』（中華書局、1999年12月）第四冊、10465裏側、通称「出虹」。

46) 晁福林「說殷卜辭中的「虹」—殷商社會觀念之一例」（『殷都學刊』2006年第一期、1-4頁）。

47) 周丙華「甲骨文「虹」字文化考釋」（『中國文化研究』2009年春之卷、155-161頁）。

48) 林巳奈夫『龍の話 図像から解く謎』（中公新書、1993年）、198-208頁。

49) 『後漢書』「五行志」五

記述の中に、蔡邕が言う「蜺」とは、

霓、屈虹青赤或白色。霧气也。从雨（段注「霓為陰氣。將雨之兆。故从雨。一从虫作蜺。猶虹从虫也。」）。兒聲<sup>50)</sup>。

とあり、「霓」の変体である。また、

暈適背穴抱珥虹蜺<sup>51)</sup>。

虹蜺、彗星、天之忌也<sup>52)</sup>。

とあるように、「虹」「蜺」を連用する例もある。それは、「虹」「蜺」が提示する現象は同じであるからと考えられる。つまり、前掲蔡邕の言葉からすると、むしろその記述は、虹に足と尾がないため、龍ではないという認識が強調されている。

一方、図像資料においても、先秦時代の玉器が伝承の証拠としては見られるが、第一分布区の画像石には、あくまで山東省の二、三件だけである。さらに、「交龍」「雙結龍」とは違って、碑文などの補助証拠も欠けている。

漢代において、図21が示したものは「虹」・「虹霓（蜺）」と呼ばれていることは想定される。しかし、それが龍と認識されているとは言い切れない。確かに、同地域の他の龍図像と比べて、その外形は一部龍の特徴はもっている。ただし、それもやはり「形貌似龍」というところに留まるものである。本稿では、前章で検討した龍の体の八つの部分のうちの頭と鱗を考察するときの参考にはよいが、龍の一種と認めるのはさすがに不適切であるとする。

## 5、小結

本章では、第一区における龍の画像の構図について考察した。まず発生時期が早い「雙結龍」「交龍」と「龍と虎」の構図の検討により、「雙結龍」「交龍」から「双龍穿壁」に変貌したことで、龍と虎の組み合わせの中の龍が蛇型から走獸型になったこと、といった時期に伴う変遷を取り上げた。

また、上述の二種類の構図が変化してもなお一種の規範として全地域の画像石の存在と共にとずっと残されていたことと、そこに起きた変化が第一区全体に及んだこと、それに、各種龍の図像の墓における配置が一致することからも、龍の図像の地域的統一性があることを確認でき

50) 『説文解字』雨部。

51) 『漢書・天文志』。

52) 『淮南子・天文訓』。

た。

そして、後漢中期以降における龍と犬の画像の外形と構図が共に近くなった事実により、走獸型の龍が流行し、その影響は深遠なものであるということが明らかになった。

他に、少数例ではあるが、虹とされる「双頭龍」の図がある。考察によれば、虹は漢代において、龍として認識されておらず、ただ外形に龍に類似する部分があるとされていたことがわかった。よって、「双頭龍」のような図は、龍の図像として扱うよりも、龍の外形を検討するときに参照資料としてみるべきである、ということを確認した。

## おわりに

龍の画像の構図への考察により、変容したところもみとめるが、「双龍穿壁」「龍と虎」という二つの定着された形式の構図が存在するということがわかった。かつ、龍の具体的な外形にも、やはり地方と時期にかかわらず、「牛の角」や、「牛の耳」や、「驢の嘴」や、「虎の掌」や、「蛇の鱗」などがあるように、一致する要素が多数ある。

一方、漢画像石第一分布区において、時間的に、蛇型の龍から走獸型の龍へ転化したという龍の体型における変化がとらえられる。それは具体的に、前漢早中期から後漢初期の山東省で見られる蛇型から、後漢早期以降の全域に見られる走獸型の龍に、ということである。一見、山東省だけに蛇型と走獸型の両方が見られるようになるが、それは地域内部では、山東省が相対的に早い時期からすでに画像石墓の建設を始めたためである。後漢晩期まで第一区全体に蛇型のままの「双龍穿壁」の図が点在していることからうかがえるように、走獸型の龍が蛇型の龍に代わり、主流になったということは間違いない。

しかし、龍の外形に時間的変化があったとはいえ、第一区の周縁地方における走獸型の龍の受容は、発源地の山東省と基本的に同じ時期に完成した。この事実を、同じく後漢早中期くらいに完成した「双龍穿壁」の構図の普及とあわせて考えてみると、後漢時期の文化の伝播と受容の積極的な一面がうかがえる。

第一区内部における地域性の事例というと、龍と関係がある故事とされている「泗水昇鼎」伝説を描く画像石がある。図22に示したように、確かに現存の「泗水昇鼎」の画像石は、基本的に泗水流域の範囲内に発見されたものである<sup>53)</sup>。しかし、それは龍の図像の地域的差異というよりも、地縁的親近感の程度による「泗水昇鼎」の伝説の受容の差異としてとらえるべきではなからうか。

53) 邢義田「漢畫解讀方法試探—以「撈鼎圖」為例」(『中國史新論 美術考古分冊』中央研究院歷史語言研究所, 2010年、13-54頁)、31頁。

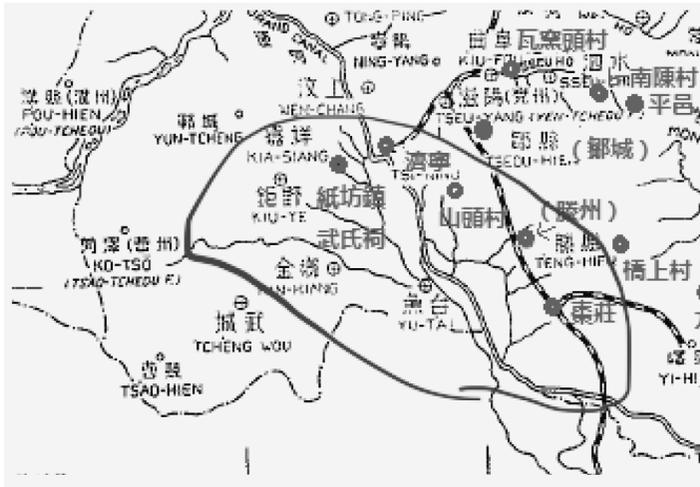


図22 「泗水昇鼎」の図の分布（実線の枠内）<sup>54)</sup>

総じて、漢画像石第一分布区における龍の図像は、多少変化と相異するところがみられても、地域的にも時間的にも、一貫性と統一性がある。確かに龍と龍にまつわる諸文化は、ただ多くの文化の中の一つである。しかし、その普及する地域の広さと影響の深さは疑いのないものであろう。

54) 原図は巴黎大學北京漢學研究所『漢代畫像石全集 初編』（學苑出版社、2014年）より。